

昭憲皇太后と華族女学校

米 窪 明 美

明治十八年十月十三日、現在の学習院女子中等科女子高等科の前身である華族女学校は、皇后美子のちの昭憲皇太后の思召しにより、華族女子のための教育機関として誕生した。発足当時の生徒数は百三十三人、年齢は満六歳から十八歳まで、下等小学科、上等小学科、初等中等科、高等中等科を各々三学年に分けた。

『明治天皇紀』によれば、華族女学校（明治三十九年四月以降、学習院への合併により学習院女学部と改称）への皇后美子の行啓は四十五回、うち十六回が明治十九年から二十一年の間に集中している。

なぜかといえば、この時期明治天皇夫妻は赤坂仮御所に住み、華族女学校の敷地はそれと地続き、謂わば華族女学校は天皇夫妻の庭先に建設された学校であったから

だ。それゆえ皇后美子は行啓という正式な形をとらず、しばしば裏門から徒歩で僅か数人のお供を従える気軽なスタイルでこの学校を訪れている。

開校直後で、貴族階級の少女たちをいかに教育すべきか試行錯誤のなかにあった華族女学校にとって、皇后美子の存在が精神的な支えとなったことは想像に難くない。皇后美子の方でも、将来国家の指導者となる人々の妻となり母となるであろう少女たちを育てる、華族女学校への思い入れはひとかたならぬものがあつた。全四十五回の行啓のなかで二十一回を占めるのが、卒業式や運動会などの式典・行事への出席ではなく、ごく普通の日の授業参観であることがそのことをよく物語っている。

女官出身で創立時の幹事兼教授、のちに初代学習院女

学部長となる下田歌子によれば、皇后美子の授業参観はすこぶる熱の入ったものであったという。

時には当日の朝「本日午後より行啓」との御内達があつて成らせらるる場合もありましたので、私共平常のままでも御迎へ申上ぐるやうな誠に恐懼に堪へないことも少くありませんでしたが、陛下は時には校内を隅々まで御覧あり、御昼食を召され、終日学校に在らせられることもあり、半日位で還御になったこともありす（昭憲皇太后御坤徳録）

明治二十二年から一年間華族女学校で英語教師として教鞭をとったアメリカ人のアリス・ベーコンも友人宛ての手紙の中で、皇后美子の授業参観の様子を伝えている。授業参観といへば、教室の後方に保護者が立ち授業を眺めるのが普通だが、皇后美子の場合は教壇の側に黒い漆塗りに金蒔絵を施した椅子が置かれ、教室前方から授業を眺めていたという。

また、習字や絵画の授業では教室内をくまなく巡回し、時には生徒の和歌や作文を携えて還ることもあったというから驚かされる。皇后美子の振る舞いは単なる後援者のそれではなく、まるで教員側の一員のような錯覚さえ覚えてしまう。実際、下田歌子によれば参観のあと、〈種々の御注意の御言葉を賜はることも御座いました〉

（『同上』）というのだから、教員にとつては最後の最後まで気の抜けない一日であったことだろう。

これに対して生徒の方はというと、こちらは案外緊張していない。アリス・ベーコンは、皇后が教室に現れたときの生徒の様子を記している。

私が教室に入ったときは、生徒たちはたいそう興奮していたので、実際に皇后がお見えになったときには、ちゃんとした授業をお見せできないのではと心配したのですが、ここが小さな華族たちの理解できないところですよ。彼女たちはその時がくると、まさに完璧なまでに沈着冷静になることができます。皇后の前の朗読したときほどに、立派にできた生徒たちを見たことがありません（『華族女学校教師の見た明治日本の内側』）

熱心な参観が終わると、大抵、教職員や生徒への下賜品があった。例えば、アリス・ベーコンは美しい白い絹を何本か頂いたと記している。

一方、生徒への下賜品は主に教科書や和歌集などの書物だったが、小さな美しい品々――筥、袖落（使用済みの懐紙などを入れる小さな袋）、扇など――が添えられていることが多かった。あくまでも主役は書物で、小さな美しい品々は脇役なのだが、彼女たちの記憶の中で光り輝

いているのは脇役の方。大久保利通の娘で、外務大臣をつとめた伊集院彦吉の妻・芳子も小さなプレゼントを楽しみにしていた一人だ。

其の都度美しいはこそや扇などを賜りました。此学校なればこそと感激の極みでございました。其の折の扇子は今なほ大切に致して居ります（『同上』）
この文章が書かれたのは昭和二十九年頃、彼女たちは戦中戦後の混乱期の間もこれらのプレゼントを大切に保管し、少女時代の思い出のよすがとしていた。

明治十九年七月三十日、皇后美子は初めての洋装を披露する舞台として、華族女学校の卒業式を選んでいる。

それ以前の皇后は、絵画館所蔵の「華族女学校行啓」（明治十八年十一月十三日の開校式）が伝えるように、伝統的な宮廷の衣装に身を包み、伝統的な化粧を施し、髪型はおすべらかしと呼ばれる後ろへ垂らす形と、まるで絵巻物から抜け出してきたかのようなスタイルであったのだから、突然ドレスで現れた皇后に少女たちは目を見張った。

洋装はただドレスを身にまといえよいいのではない。髪型、化粧は勿論のこと、立居振舞までもが一変する。皇后の一挙手一投足から目が離せない。少女たちの耳には、

衣擦れの音さえも従来の雅な宮廷衣装とは異なり、華やかなリズムに響く。

今も昔も、少女たちは無条件で繊細で美しいものに惹かれる。髪を結びあげ、西洋風のメイクを施し、ドレスの裾を引きながら背筋を伸ばし静々と歩く華奢な皇后美子の姿に、思わず少女たちのため息がこぼれた。皇后美子の歩き方、話し方、その立居振舞の全てが少女たちのお手本となった。

『学習院女子中等科女子高等科一〇〇年史』によれば、華族女学校の教員には下田歌子、津田梅子、石井筆子、野口みかなど、のちに女子教育の分野で活躍する人々が在籍し、また関根正直（国文）、川田剛（漢文）、奥好義（音楽）、坂正臣（国文）、鳥山啓（博物）、田中阿歌磨（地理）、那珂通世（歴史）、松浦詮などの著名な教員が顔を揃えていた。その他に、十一人もの外国人女性教員が在籍し、英語やフランス語などの指導にあたるなど、豪華な布陣となっている。

至れり尽くせりの華族女学校の授業の中でも、特に注目すべきは体操の科目の設定である。女子校で体育の授業があるのは、今から見れば当たり前のことなのだが、当時の概念からいえば眉をひそめる向きが多かった。

しかし、佐々木高行の孫で、常宮、周宮の御相手として奉仕した小山光衛によれば、皇后美子は（当時、即ち明治の中頃迄上流社会の子女の身体の虚弱なるを御心痛遊ばされ、体育にも重きを置く様御下命になり、華族女学校開設以来運動を御奨励になり）（「昭憲皇太后御坤徳録」と、体育を殊のほか重視していた。

明治二十七年には華族女学校初の運動会が開催される。現存する明治四十年前後の運動会の写真によれば、袴姿の少女たちがたすきをかけて奮戦し、運動場を取り囲むように設置されたテントの中にはあふれんばかりの保護者の姿が見える。少女たちは「赤、お勝ち遊ばせ!」、「白、おしつかり!」と、しきりに掛け声をかけ、そのたびに父兄席からは大きな歓声があがった。

皇后美子も奨励の意味を込めて、四皇女や皇族妃と共にしばしば運動会に足を運ぶ。埃っぽい運動場にドレス姿で現れた皇后美子は、煙草盆から愛用の銀の煙管を取り出し、煙草をくゆらせながら少女たちの舞や競技に目を細めていた。

体操の成果もあり、少女たちの体格は目覚ましく向上し、活発に振舞うようになってゆく。貞明皇后の二十回忌の記念に、秩父宮妃、高松宮妃、三笠宮妃の肝いりで編まれた『貞明皇后』によれば、華族女学校時代の貞明

皇后は小柄ながらも、（なかなかのおはねさん）だったという。

その当時、クラスでは賊軍官軍遊びという、男の子の喜びそうな勇ましい遊戯がはやっていた。動作の機敏な節子姫は、小柄ながらも、大将格にもしたてられて、級友をしたがえて暴れていた（『貞明皇后』）

もはや虚弱体質を心配する必要はないだろう。新しい時代にふさわしい御姫様の誕生である。

ここまで皇后美子の華族女学校への様々な配慮をみてきたが、同校への最大の贈り物はなんとといっても「金剛石」「水は器」の御歌である。明治二十年三月十八日、皇后美子より賜った御歌には曲がつけられ、事実上の校歌として現在に至るまで歌い継がれている。

「金剛石」——「金剛石も　みかかすは　珠のひかりは　そはさらむ　人もまなひて　のちにこそ　まことの徳は　あらはるれ　時計のほりの　たえまなく　めくるかごとく　時のまの　日かけおしみて　はけみなば　いかなるわざか　ならさらむ」

「水は器」——「水はうつはに　したがひて　そのさまさまに　なりぬなり　人はましはる　友により

よきにあしきに うつるなり おのれにまさる

よき友を えらひもとめて もろともに こころの
駒に むちうちて まなひの道に すすめかし」

御歌は優れた友人と切磋琢磨しながら学んでゆくことの大切さを説く。華族女学校設立以前、日本の上流階級の女性たちは友人と呼ぶ存在を得る事が極めて難しかった。彼女たちは自宅に家庭教師を招く形で教育を受け、交際範囲も縁戚関係に限られていた。そのような彼女たちが教室の中で一個の人間として、同年代の少女と対等な人間関係を結ぶ、ということは画期的な出来事であった。皇后美子は自分自身が学校教育を受けていないからこそ、友人を持つことの有難味を痛感していたのだろう。華族女学校というと、さぞや立派な設備が整っているのではと考えてしまうが、初期には暖房が不十分で非常に寒かった。明治二十年六月に生徒の服装は洋装へと切り替わるが、冬季には室内で外套を着用させていた。明らかなマナー違反だが、背に腹はかえられぬ。その後、校舎が手狭になったために永田町へ移転し、洋服の着用を緩和して和服着袴を認めるも事情は一向に良くならな

い。
梨本伊都子（旧梨本宮妃）によれば、手や足の指に霜焼けが出来て黒い編み上げ靴を履けず、とても困ったと

いう。

足の指など痒くてたまりません。そこで届けを提出するのです。

「凍傷に付き靴使用できず、草履使用許可お願い致します」すると「何日間許可す」という担任の先生の判子が押された許可書をいただいて、草履を履くことができるのです。その許された期間になおらない時には延長願いを提出し、三学期が終わる頃まで草履を使用している方もおりました（三代の天皇と私）

紫の銘仙の元禄袖に海老茶の袴、ハイカラさんそのものといった御姫様の足元に霜焼けが出来ていたとは驚かされる。このような温室育ちの花々にとってはいささか厳しい環境を共有しつつ、少女たちの友情は育まれた。やがて少女たちは学校を巣立ち結婚するが、その相手はやはり上流階級出身者であることが多く、彼女たちの交友ネットワークは結婚後も実家の為、婚家の為に大いに生かされる。少女たちの友情が生涯続いてゆくことを、皇后美子は誰よりも望んでいた。

——第二次世界大戦の戦火は皇后美子の愛した少女たちの楽園へも容赦なく押し寄せる。昭和十九年八月当時

青山にあった女子学習院は、初等科四年から中等科二年（二十年四月からは初等科三年以上）までの希望者を栃木県塩原の疎開学園へ移し、東京に残った中等科三年以上の生徒は校内に設置された学校工場で、軍事包帯の包装や真空管組み立てなどの勤労作業に従事する。

昭和二十年五月二十五日、東京は大規模な空襲を受け、折からの強風にあおられ波立つ火の海は、女子学習院をあっという間に飲み込んだ。

戦後、学習院は宮内省と分離し私学となり、新制の学習院女子中等科女子高等科は紆余曲折の末、戸山町の旧近衛騎兵連隊跡地にて再出発し現在に至る。この地に、瓦礫の山と化した女子学習院の焼跡から持ち出されたものが今もある。

御歌碑。昭和十年に開校五十年を記念して建立されたもので、皇后美子から下賜された「金剛石」「水は器」が刻まれている。正門から校舎へと続く小道の脇を挟んで、グラウンドが一望できる位置にそれはある。

御歌が指し示すものは、教育の普遍的な目標であり、二十一世紀の現在にあっても色あせることはない。それゆえ学習院女子中等科女子高等科では入学式などの式典で歌うだけでなく、中一古文、音楽、高一音楽など様々な授業で学習教材として取り上げ、教育方針の要として

いる。

放課後御歌碑の前に立つと、私の背後で部活動にいそしむ生徒たちの声がよく聞こえた。朝夕に少女たちが友人と笑いさざめきながら前を通り、運動会には昔と変わらぬ熱戦がよく見渡せるこの場所で、御歌碑は今日も静かに少女たちの学校生活を見守っている。

〈引用文献〉

『昭憲皇太后御坤徳録』、明治神宮崇敬婦人会編、一九五四年

『華族女学校教師の見た明治日本の内側』、アリス・ペーコン著

久野明子訳、中央公論社、一九九四年

『学習院女子中等科女子高等科125年史』、学習院女子中等科女子高等科、二〇一〇年

『貞明皇后』、入江相政、木俣修、福田清人、石川数雄編、主婦の友社、一九七一年

『三代の天皇と私』、梨本伊都子、講談社、一九七五年

（学習院女子中等科女子高等科講師）